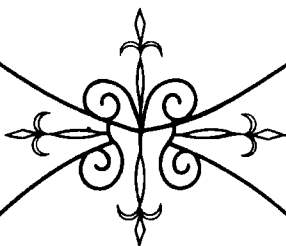




三島由紀夫全集



29

評 論

V

監修／石川淳 川端康成 中村光夫 武田泰淳
編纂／佐伯彰一 ドナルド・キーン 村松剛 田中美代子

新 潮 社

本文印刷 株式会社精興社

口絵印刷 松本精喜堂印刷株式会社

付録印刷 株式会社精興社

口絵製版 株式会社学術写真製版所

製本 大口製本印刷株式会社

製函 日本紙バルブ商事株式会社

本文用紙 特漉上質紙・三菱製紙株式会社

皮革 靱井皮革株式会社

表紙用紙 手漉局紙キラ引・株式会社山田商会

扉用紙 ゴールデンアロー・特種製紙株式会社

見返用紙 しぶ茶堅紙・特種製紙株式会社

函用紙 Sペラン絹目・特種製紙株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします

三島由紀夫全集 第二十九卷 目次

不道徳教育講座	七	現代の夢魔——「禁色」を踊る前衛舞踊	三七〇
春日井建氏の歌	三三六	團	三七〇
憂樂帳	三三二	俳優といふ素材(女は占領されない)	三七三
映畫見るべからず	三三四	舟橋聖一氏の「若いセールスマンの戀」	三七五
「橋づくし」について	三三六	六世中村歌右衛門序説	三七八
十八歳と三十四歳の肖像畫	三三八	櫻姫と權助	三九二
三島由紀夫宅のもめごと——オーナー	三三九	生命の讚歌	三九四
の辯	三四〇	圓地さんと日本古典	三九五
餘暇善用——樂しみとしての精神主義	三四三	「題未定」——新連載豫告(宴のあと)	三九八
「戦後日本の思想」・「悪徳の榮え」	三四六	三島由紀夫の生活ダイジェスト	三九九
川端康成氏再説	三五七	黒いあこがれ——新連載について(お嬢さん)	四〇二
「鏡子の家」そこで私が書いたもの	三六〇	ぼくはオブジェになりたい	四〇三
追ふ者追はれる者——ペレス・米倉戦	三六一	カフカの——作家の眼	四〇〇
觀戦記	三六一	「侃侃諤諤」を駁す——交友斷片	四一五
女が美しく生きるには	三六三			

卷頭言(「婦人公論」)	四八	受難のサド	五二
社會料理三島亭	四三	わが夢のサロメ	五五
今年のプラン	四四	オセロー雜觀	五七
「熱帶樹」の成り立ち	四六	一つの政治的意見	五〇
「サロメ」の演出について	四八	友情と考證	五四
オレは實はオレぢやない(村松剛氏の 直言に答へる)	四〇	ベラフォンテ讚	五七
映畫初出演の記	四三	發射塔	五三〇
出演の辯(「からつ風野郎」)	四五	石原慎太郎氏の諸作品	五三
カミユの文學	四九	「黒いオルフェ」を見て	五六五
初出演の言葉(「からつ風野郎」)	四七	ある日私は	五六八
解説——「プロゼルビーナ」	四九	解題	五七三
「エロチシズム」	五〇	校訂	五七四
「からつ風野郎」の情婦論	五〇五		

三島由紀夫全集 第二十九卷 評論 (5)

不道德教育講座

知らない男とでも酒場へ行くべし

十八世紀の大小説家井原西鶴の小説に「本朝二十不孝」といふのがあります。これは中國の有名な「二十四孝」をもどつたもので、よりによつた親不孝者の話をならべたものです。大體、親孝行の話などは、讀んでもおもしろくなく、くすぐつたくなるやうな、わざとらしい話が多いが、そこへ行くと、思ひ切つた親不孝の話は讀んでもおもしろく、自分は相當親不孝のつもりでも、そこまで徹底できる自信はなくなり、「へえ、親不孝にも上には上があるもんだなあ」と妙に及びがたい氣持になり、それに比べると、自分なんかは相當な親孝行だと思はれてくる。そしてまづ、自分を親孝行だと思ふことが孝行のはじまりですから、かういふ本はなかなか益があることになる。私が流行の道德教育をもどつて、「不道德教育講座」を開講するのも、西鶴のためしにならつたからである。

これはつまらない前置きですが、最近のある週末の夕方、私は仕事の友人と銀座の裏通りを歩いてゐました。

すると實に人目に立つ三人組がやつてくる。そろひの白い長袖の運動シャツに、そろひのタイ

トなズボン、髪はセバーグ刈りやら三人三様の流行の髪型で、ネックレスや、チャラチャラいろんなもののぶら下つたブレスレット、……いづれも十七、八で、同じやうな背丈、お化粧も都會の先端を行くといふ感じで、しかもあくどからず、三人ともイキイキとした表情の個性的な美少女ですから、人のふりかへるのもムリがありません。私も新鮮なおどろきに打たれ、思はず首を百八十度轉回した。むかうもふりむいて私の名を言つてゐる。こちらは十分見たから、又前を向いて歩きたすと、どうやらうしろからワイワイついてくる様子です。

私は友人と夕食をせねばならぬのでレストランの前で立ち止り、少女たちに「さよなら」と言つたので、むかうも「つまんないわ、つまんないわ」と言ひつつ、そのまま別れてしまつた。

私が夕食を食べながらブツブツ言つたので、「大丈夫だよ。銀座といふところは、一度逢つたら必ずもう一度逢ふんだから」

と友人が慰めました。正にその通り、夕食後、松坂屋へ向かふ交叉點を渡らうとすると、そこにゐた三人組はまさしく彼女たちです。

「ヤア、又逢つたね」

「どこへ行くの」

「ロッカビリー喫茶だよ。一緒に來ないか」

「行く。行く」

三人組は跳んだりはねたりしながらついて來て、いかにも無邪氣なので、私も満更でない氣持でした。私は見かけはどうでも無邪氣な人が一番好きです。お互ひの自己紹介。A子はちよつと昔の女優の志賀曉子に似てゐて、目張りを目の下に入れ、豊かな顔立ちだが、年に似合はぬ倦怠

の漂つた表情をときどきする。C子は、年増らしい面長な顔立ち。B子が一番可愛く、私の初戀の人に似てゐて、ほうつとした感じで、事實一何にも知らないのが、一生けんめい二人の惡友のマネをしてゐるといふ様子に見える。三人とも高校二年生といふことでした。

喫茶店はその日ロッカビリーをやつてゐないで、有名なドラマーを中心にしたジャズ・バンドだつたので、われわれはちよつとガツカリした。そのドラマーが或る賣り出しの女優の戀人だといふ知識を、私は少女たちに傳授しました。

「へえ、あんなイカさないの？ N（女優の名）ちゃんつて、どういふ趣味なのかな」

「君はどういふ趣味なのさ」

「もちろん面食ひよ」

「男は顔ぢやないよ。心だよ」

「アーラ、もう一つあるわねえ」

A子はC子をつつき、一度にキャーッと笑ひ出し、B子もわけがわからずに笑ひ出す。私は少し呆氣にとられて、友人と目を見合はせました。

この席があんまり騒がしくて、ドラムのひびきを壓するほどになつたので、音楽の間に擴聲器が、「お客様の一部におさわがしい方がをられますが、演奏中は御靜肅にねがひます」と注意を促した。するとB子は、可愛い唇を尖らせてかう言ふのでした。

「アーラ、イカさないわね。かういふところはつくろぎに來るところなのに、むつかしいこと言つてるわ」

前の席の男の學生たちがこれをきいて

「つくろぎだつて、プーッ」

と吹き出しました。B子はくつろぎを言ひまぢがへたのである。

さういふときすぐB子は眞つ赤になるので可愛らしい。

「さつき僕と一旦別れてから、君たちは何をやってたんだい」

「よつかかつて来る難破船をおしのけおしのけ歩いて来たんだわ」

こんな會話ののち、A子が私の袖口からあらはれた腕の毛に興味を持つて、「ずいぶん毛深いのね」と言ふなり、私の腕毛を引つ張り出したので、あとのB子もC子も負けずに引つ張り出した。このへんの、好奇心と行動との直結ぶりは實に鮮かで、挨拶のしやうがありません。

——しかしそこを出てから、私がサントリー・バーへ誘つて、三人ともおとなしくついて来たのはいいが、バラバラ雨がふりだして、折角セットした髪が臺なしにならぬやうに、三人はあわてて髪を押へた。バーでスタンドに並んでかけて、A子とC子は、煙草を吹かし、お酒を呑んだ。B子はどつちもダメだつた。

「君たち、ボーイ・フレンドあるのかい？」

「そんなものないわ」

だが私の見るところ、少なくともA子とC子は、はじめの新鮮な印象を裏切るやうなものを持つてゐるやうな気がするのでした。さう思ふと私は妙にシュンとしてしまつた。別に彼女たちに對して何の悪意も感じないが、何だか、十七や十八の年ごろで、目張りを入れた目に倦怠をにじませながら、潑刺と胸を張つて歩く態度と、どこかだるさうな態度とのチグハグなカクテルを示して、タバコをふかしてゐるその横顔を見るうちに、何だかとてもフビンな、可哀さうな気がし

てしまった。大人といふものは、ただむやみに若さにあこがれてゐるわけではなく、大人の目から見ると、若さの衰れさもよくわかるのです。

そのうちA子が妙なタバコの喫み方をしだした。二本のタバコをムリにつないで、二本目の先へ火をつけて、吸ふのです。なかなか煙はうまくとほらない。B子とC子は一心にこれを見守つてゐる。たうとう二本目のタバコはぐらぐらと傾いて来て、落ちさうになつた。

「アラいやだ。だらしがないア。やりすぎだわ」

とA子が言つた。力なく傾いてきたタバコから、こんな性的な連想が出たものらしい。するとC子はキヤーカー笑ひ、B子もわからない顔をして、面白さうに調子を合はせました。

そのとき私のシュンとした氣持は、どうやら頂點に達したらしい。

私の目の前では、若いパーテンが、あらはに顔に輕蔑を示し、佛頂面をして、ものをたのんでもロクに返事もしない。私はますます彼女たちが氣の毒になつた。

サントリー・バーを出ると、そぼ降る雨の中で、私は三人それぞれに別れの握手をしました。

「送つてかなくても大丈夫かい？」

「ヘッチやらよ」

しかし握手のとき、私の掌を、A子だつたか、C子だつたかが、人差指でコチョツとくすぐつて、ゲラゲラ笑ひ出したのにびつくりした。これはいけません。これは品行のよくない女のすることだ。いくら冗談でも、これはいけません。いくら冗談でも、これは、「一緒に寝ませう」といふサインなんですからね。

……その晩、家へかへつてからも、私は少々ぼんやりしてゐました。どうやら一番バカで、一

番からかはれたのは私なのだらうか？ 彼女たちはわるい演技をうんと見せつけたけれど、實際は清純そのものの、多少偽悪的なハイ・ティーンにすぎぬのだらうか？——

私は大人の甘さを以て、かういふ想像のはうを、喜んで心にうけ入れました。

教師を内心バカにすべし

学校の先生を内心バカにしないやうな生徒にろくな生徒はない。教師を内心バカにしないやうな學生は決してえらくならない。……かう私は斷言します。しかしこの「内心」といふ言葉をよく吟味して下さい。この一語に千鈞の重味があるのですから。

「大人に對するレジスタンス」などといふ言ひ方がよくはやる。「不潔な大人」とか、「大人は信賴できない」とか、「大人にだまされるな」とかいふいひ方もはうばうでよく。ところでかういふ表現は、かの石原慎太郎氏が發明して一般化したものですが、令弟石原裕ちやんが若い世代の代表者として暴れ廻るやうになつてから、大人はもうシンとしてしまひ、裕ちやんに壓服されたやうにみえ、ハイ・ティーン諸君も裕次郎君のおかげで百萬の味方を得て、もう大人の存在を氣にかけなくなつたらしい。……しかし、かういふときこそ、一方では、大人たちが爪をみがいてゐるのです。大人しく見える大人が實力を示しはじめの時期なのです。よく目をひらいてごらん。裕次郎君の映畫の畫面に出てくる大人は大てい弱蟲だが、本當の大人は畫面にあらはれない。映畫會社の重役たちこそ本當の大人で、裕次郎君の後楯をして大儲けをしてゐるのは、實はハイ・ティーン諸君ではなくてかういふ大人たちである。

私は第二講で、「教師を内心バカにすべし」といふ不道德訓を説きつつ、諸君に對大人策をさ

づげたいと思ふ。何故なら大多数の教師は大人であるからです。学校の教師はズレてゐると諸君は思ふ。よろしい。われわれの少年時代にも、教師は大ていズレてゐて、その時代的センスたるや、噴飯物であつた。一方ではバカに新らしがりの教師がゐて、かういふ教師は一そう鼻持ちならなかつた。われわれが内心教師をバカにしてゐたのもムリはない。

あるときは謹嚴な中等科長（中學校長のこと。學習院での呼び名）が肅々たる足取で歩いてゐると、突然木かげに無氣味な銃口がせり出し、

「ダーン！」

と銃口が火を吹いた。中等科長はあわてて駈け出したが、又その姿を狙つて、別の方角の櫛の木かげから、青く光る銃口がせり出し、又もや、

「ダーン！」

科長は駈けて駈けて、銃の包圍を突破して逃げ了せたと思つたとたん、みごとに誘導されて、念入りに作られた落し穴にフハリとはまつてしまつた。銃撃と見えたものは、それぞれ二人組が木かげにかくれてゐて、一人は彈丸の入つてゐない空氣銃で狙ひをつけ、一人はその足もとでカインシャク玉を破裂させてゐただけのことである。

——「暴力教室」といふ映画などでは、黒板に野球のボールのぶつつけられる場面が、ショックキングに撮られてゐるが、われわれの時代には、教師の背中のおそばの黒板へ、ナイフを投げつけた奴があるのだから、すごい。学校の先生が、命がけの商賣であることは、今にはじまつたことではありません。

もつと無邪氣ないたづらでは、同級にKといふ薄バカがゐて、音樂の時間に、教師が黒板のは

じからはじまで、長々と楽譜を書いてゐるあひだに、存分にKをいぢめてたのしむのが、Mといふ隣席の學生であつた。まづ上着のポケットに手を入れて、ピストルの形をこしらへ、Kの耳もとで、すごい聲で、

「おい、上着を脱がないと、射つぞ」

とおどかすのです。

「ア、脱ぐよ。すぐ脱ぐよ」

「早く脱げ」

「ア、射つのは待つてくれ。命ばかりは……」

上着が脱がれます。ついで、

「コラ、シャツも脱ぐんだ」

「ア、脱ぐよ。脱ぐよ」

「ズボンも脱がないと、射つぞ」

「ア、脱ぐよ。待つてくれ」

かくて悠々と楽譜を書きをはつて、白墨の粉だらけの手をはたいて、教師がふりむくと、そこには、制服の學生たちの中に、ただ一人、猿股一つの學生がふるへてゐるのを発見するといふ寸法でした。

少年期の特長は残酷さです。どんなにセンチメンタルにみえる少年にも、植物的な残酷さがそなはつてゐる。少女も残酷です。やさしさといふものは、大人のざるさと一緒にしか成長しないものです。